

ロビンさんの 音楽 エッセラービー①

Rainstick Therapy

「レインスティック セラピー」?

民族楽器の中でレインスティックは、耳に心地よく、リラックスできる「癒し系」の楽器として人気です。もともとは豊作を願ったり、かんばつ被害を食い止めたりするために神々に雨乞いをする際に使われる道具であり、人々は儀式の際に歌と一緒に演奏しました。いまでも、この伝承が残るアメリカ大陸の砂漠地域ではレインスティックはただの楽器じゃないのです。

レインスティックの音を聞いた神は、雨を降らして実りをもたらし、人々に豊かな生活を約束します。音楽の持つ力が我々の生活にさまざまな影響を及ぼしたり、論理的に説明できないような結果をもたらしたりすることは、近頃やっとなられるようになりましたが、旧大陸の人々は、祝福と癒しを与え奇跡を起こすこの道具を何千年も前から信奉してきたのです。

今度雨が降ったら、外に出て遊びましょうよ!子どもみたいに雨の中を跳びはねましょう。長い散歩もいいですね。街の喧騒から離れ、人々の話し声のしない公園や森で、じっと雨の音に耳を澄ませてください。目を閉じ、深く息を吐いて、気持ちのいい空気を吸い込み、手のひらに雨のしずくをためて、頬や腕や足を軽くぬらしてみましよう。



●ロビン・ロイド (ミュージシャン・音楽セラピスト)
イリノイ州 (USA) 出身。大学卒業後、アジアを拠点に活動。50カ国以上を旅し、そこで出会う原生林や熱帯雨林、山や川、砂漠、鳥の声、動植物などからインスピレーションを得る。カリンバ、笛、尺八、三線、パーカッションなどさまざまな民族楽器に囲まれ、マルチ・プレイヤーとしての評価が高い。お年寄りや障がいのある人たちのための音楽セラピーの実践と普及にも努めている。
<http://www.robbin-muse.info/index.html>

石田教授の コミュニケーション モノローグ

「人と話をするのは 簡単なことのようにですが…」

同じ場面で同じ言葉を使っても、受け取る意味は人それぞれ。人と話をするのは簡単なことのようにですが、とても難しいことなのです。

東日本大震災のボランティアで東北へ行ったとき、「ボランティアなんかいらん」と声高にぶつけてくるおじさんに会いました。ところが話を聞いていると、とても辛く、助けてほしいというのです。保育所の理事長さんなのですが、子どもの疲れはもちろん、保育士も疲れ果ててきて、何か手を打たないと共倒れになるというのです。それなのに「ボランティアはいらん」というのです。原因はボランティアという得体の知れない言葉にありました。理事長さんの頭の中の「ボランティア」は、意味不明、理解困難な「カタカナの単語」だったのです。

心理テストで絵を描いてもらうバウムテストというものがありますが、先日、木を描いてもらったら、中に不思議な木を描いている人がいました。それは、バナナの木でした。聞くと沖縄の出身だというのです。彼女の心の中にある木はバナナの木。でもそれは多くの日本人にとって想像できない木の姿です。こんなふうに同じ言葉が違った意味やイメージで伝わるとき、人と話をするのはとても難しくなるのです。



被災者とボランティア、立場が違う中で活動する災害ボランティア。言葉のイメージを共有してこそ作業がスムーズに進みます。

●石田 易司 (いしだ やすのり)

桃山学院大学社会学部社会福祉学科教授。1948年生まれ。京都府立大学文学部政学卒業。京都府立木津高等学校教諭を経て朝日新聞社入社。厚生文化事業団で社会福祉・青少年育成事業を担当。1998年から現職。その他、大阪市いきいきエイジングセンター館長、大阪市ボランティア情報センター所長、日本キャンパス協会常務理事、日本福祉文化学会副会長など。



Column 連載エッセイ

人なつっこい 教室の人気者・中間聡君

ゆきえ先生の
明るい
教室出席簿①



中間聡君が、お母様に連れられてやって来たのは17歳の時。「字は書けませんがいでしょうか」とお母様。「もちろんいいですよ」とお答えしました。

私の横に座り、半紙に大筆で線を引く。そのダイナミックさ、その余白の美しさに思わず息を呑む。私が思うところでピタッと筆が止まる。何枚書いてもバランス感覚がブレない。凄い青年が入って来たと思いました。あれから10年。あの時の感動が続いています。

篆書や隸書などいろんな書体のお手本を渡すと彼のセンスで見事に捉える。字のようで字でない、イメージの世界。字の持つ美しさを象徴的に表現できる。彼の世界だ。

人なつっこく誰からも好かれるタイプ。簡単な言葉しか話せないけれど、それでコミュニケーションは十分。いつだったか、教室に見学者が来た。若くてきれいな女性。彼はくっついて離れない。そんなことも彼がやれば何の嫌味もなく、むしろ微笑ましい。彼女もニコニコしていた。そして、私へのフォローも決して忘れない。「先生、きれい」「先生、大好き」。「きれい」はお世辞に決まっているが…、「大好き」は、私も彼のことが大好きなので、その言葉通り受け取っておこうと思う。

●山下 雪枝 (やました ゆきえ)

書道教室「蛸」主宰。1949年生まれ。書家・古谷蒼韻に師事するも33歳の時に変形性股関節症のため右足を手術。約1年の入院の後、松葉杖の生活となり師事を断念。10年間の痛みとの闘いの後、1994年より書や墨アートの創作のかたわら自宅で書道教室を開く。2002年より豊中市蛸池公民館で書道教室「蛸」を主宰。10年にわたって知的障がいのある人たちと歩み続けている。



運命を決めてくれた 語学学校の先生。

木島英登の

空飛ぶ車いす①

初体験は運命を決めるかもしれない。初めての海外、米国ホームステイ。語学学校で先生が「明日ハイキングがあります。参加する人は手を挙げてください」と言った。勇気を出して「私は車いすですけど、参加できますか」と尋ねた。「あなたは行きたいの、行きたくないの、どっち?」「行きたいです」「なら、行けばいいじゃない」と返された。

車いすの私が参加するので、簡単なハイキングコースに変更したかもしれない。とはいえ山道。でこぼこ、段差、傾斜がいっぱい。崖に落ちそうになりながらも、ときにクラスメイトが担いでくれた。無事に丘の上にとどり着き、素晴らしい景色を眺めることができた。

日本では「設備がないからダメだ」「前例がない」と行動する機会すら与えられなかったが、米国は違った。「出来る」「出来ない」ではない。「やりたい」のか「やりたくない」のか、そっちの気持ちが大切なのだ。やりたいの



なら、その方法を考えればいい。車いすで世界を旅するという夢を持ってアホちゃうかとされたこともあったが、自分に自信が持てた。誰もがやりたいことに挑戦していいのだと。

●木島 英登 (きじま ひでと)

ビッグ・アイ国際交流アドバイザー。世界100ヶ国以上を訪問。車いすの旅人。
<http://www.kijikiji.com/>

